

新聞記事技法

朝日新聞 2016年9月8日 (朝刊)



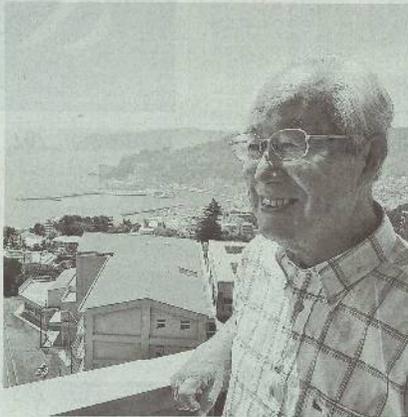
陛下のお気持ちに見たブライス先生

静岡大名誉教授 上田 邦義さん (81)

善・愛の実践 国民と共に

天皇陛下が「生前退位」への思いをこぼす。8月に表明した。日本中が注目した「象徴としてのお務め」についての陛下のお言葉をどう受け止めたのか。戦後20年近く陛下(当時皇太子)への英語個人教授をした英国人レシナルド・ホレス・ブライス(1898~1964)の研究者、自身も同氏から英文学を学んだ静岡大名誉教授の上田(旧姓・宗)邦義さん(81)に、感想を聞いた。

先月8日の天皇陛下のお気持ち。このように身を持って「象徴としてのお務め」を担う陛下の誠実な人柄と固く、国民にとり、また、私の民すべてへの深い思いやりに、あとを歩む皇族にとり良いご感動を授けました。「象徴」というお言葉が繰り返されまうになりました」と述べられましたが、とびわけ「全身全霊」をこめて敬ぶの務めを果たして、約11分のお話の中で、「争い」という単語が全に使われていない。この部分には、陛下のお気持ちを感じました。私に陛下の非戦・平和へのお気持ちを強く感じました。戦争という言葉を悲愴な過去を思い、



うえた、邦義(よ) 1934年、山形県海老川町(現・鶴岡市)生まれ。東京教育大(現・筑波大)でブライス教授に9年間(1957~66)師事。ハーバード大フルブライト研究員、マサチューセッツ大講師(能く)を経て、帰国後は、静岡大助教授、教授を経て同大名誉教授に。国際融合文化学会会長。著書に「英語能ハムレット」(研究社)、「ブライス先生、ありがとう」(三五館)など。



筑波大でブライスの研究を続ける上田邦義さん(現・静岡大名誉教授)

出たせ、政治的な意味合いを感じさせ、憲法上の制約も勘案されて避けられたと私は推察します。しかし、あの戦争を始めたのは日本なのです。戦後70年の昨年はパラオ共和国で、そして今年1月にはフィリピンで戦没者を慰霊されたことは、記憶に新しいことですが、戦後60年の2005年にもサイパンで慰霊されたこと、

陛下は昭和8(1933)年のお生まれ、私は皇后美智子さまと同じ翌9年の生まれです。陛下は幼少のころより戦争を身体で感じ、戦時下の日本をどう存続の方です。そして、私はおどろきの慰霊への旅のお姿を思い浮かべ、ブライス先生の言葉を思い出しました。

「君自身が美しくなければこの世に美はない。君自身が善でなければ、この世に善はなく。君自身に愛がなければ、この世に愛はない」。極めて実存主義的な思想ですが、陛下は「ブライス先生の言葉を確かに実践してこられたのだ」と感じました。

「君自身が美しくなければこの世に美はない。君自身が善でなければ、この世に善はなく。君自身に愛がなければ、この世に愛はない」。極めて実存主義的な思想ですが、陛下は「ブライス先生の言葉を確かに実践してこられたのだ」と感じました。

からお聞きしたことがあります。若かりし頃の陛下に英語教授中、ブライス先生は「ん」を落としてしまっただ。」「どことが拾うべきでしょうか?」陛下は「近い人が拾うべきだ」と答へられた。そのお言葉は戦後教育の科学主義、合理主義に裏付けられたものでした。しかし、ブライス先生は「では、メッセージを持ってきてもらいましょうか?」とエモーショナルに訴えた後、「自分の高い人は、常に下の者に対する心構えが必要。『ブライス・オプリージ』(noblesse oblige)高い身分に伴う義務」と語られた。それに「合理主義・科学主義でな心は通じない」として人間としての自覚性、主体性を認めたそう。

東日本大震災、熊本地震の被災者のもとへ素早く出かけ、被災者と同じ高さの目線で床にひざをつけ、お見舞いをされる天皇陛下と皇后陛下のお姿に、私は見るたびにブライス先生の教えを思い出す。陛下はよく「常に国民と共に」と言われますが、それは「平和を愛する国民」と共に「このおどろき」。この度の「お気持ち表明」は人間のあり方、生き方について師を示されたとも感じられ、また未来を担う次世代への激励を私は覚えました。(略) (構成・羽田田中)